白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.18　27 ～ 38（2013）

「非攻」・「兼愛」に見る非戦の成り立ち―平和論の源流を辿って

子ども学科　平賀　明彦

はじめに

長期にわたったアジアへの侵略戦争を，人類初めての２度に及ぶ被爆という形で終わらせた経験を持つ日本は，その多大な犠牲への悲しみと，それをもたらした近代日本の軍国の歩みへの深い反省を起点に，戦後をスタートさせることになった。そして，具体的には，徹底した平和主義の憲法を掲げ，それを自らのものとして血肉化させる努力を弛まず重ねることによって，悲しみを乗り越え，反省の証としてきた。しかし，その歩みは単線的ではなく，軍事力の発動による国益の実現や，国家威信の発揚といった主張は常に存在し，また政治勢力として，憲法解釈を恣に弄ぶことによって，軍事力の保持を可能にしようとする言説は絶えず繰り返され，実際にそれが生み出す経済的利益に旨みを持つ一群の支援を取り付けながら，自衛権の名の下に実質的再軍備が果たされることになった。もとより一方で，平和主義の原則を貫き，護憲に結集することによって，こういった動きを含めた戦争への動きを抑止しようとする声と行動も根強く幅広く取り組まれ，それらが，大きな歯止めとなって，自衛を名目とした無軌道な軍事力の拡充と，他地域，他国へのその発動を阻止してきた。

しかし，その鋭い対抗関係の構図は，戦後半世紀を経過した辺りから様相を変化させ，9.11 以後のアメリカの世界戦略の下で，アフガニスタン，イラクへと海外派兵が強行された。また，憲法の平和主義を支えるものとして堅持されてきた武器輸出３原則と非核３原則もその内実が掘り崩され，とくに前者に関しては，国内で製造した最新鋭ステルス戦闘機 F35 部品の輸出をこの３原則の例外とすることが閣議決定され，実質的に骨抜きになったことは記憶に新しい[1)]。これにより，自ら軍事力をもって国際紛争の当事国になることはもちろん，紛争を助長することをも回避するために，これまで堅持してきた武器輸出禁止の原則を形骸化させることになった。在日米軍による核の国内配備の可能性の高まりにより，非核３原則の形骸化も進みつつあり，改憲が声高に叫ばれ，「国防軍」という言葉が現実味を帯びて飛び交う政治情勢の中で，戦後の平和主義は大きな曲がり角に差し掛かっていると言えるだろう。

このような中で，護憲を軸に半世紀以上を歩んできた戦後の平和主義の意義と役割について，あらためて思いを致し，その蓄積を次に生かすために今何が求められているのかを考えていく必要があろう。その手立てはもとより多様であるが，ここではその一つの取り組みとして，これまで培われてきた平和論の系譜を辿り，源流に遡って，その拠って立つ足場を見定めることを試みてみたい。平和論の原点に立って，その現在的意義を新たに問い直すことにより，そこから説き起こされ，今に至るまでに蓄積されてきた成果をあらためて確認するとともに，それをさらに研ぎ澄まし，鍛え直して今後に結び付けていく道筋を探す手掛かりを得られればと考える。

このように位置づけた時，平和論の源流についてもまた幾筋かの路を見出すことができ，その究明の仕方も多様であるが，ここでは第１歩として東洋の平和思想の流れを確認する作業から始めていきたい。世界史的には古代ギリシャが紀元前８世紀頃からその姿を整え，哲学をはじめその後の西欧思想のプロトタイプをさまざま整えつつあったので，平和論についても原姿はそこに求められるべきかも知れないが，ここではとくに平和思想

の系譜が語られるとき，最もまとまりを持って先駆的に登場し，また後代にも大きな影響を与えたと言われる東洋思想にまず目を向けてみようと思う[2]。その場合でも，流路はやはり枝分かれしているが，本流を遡ると，西洋古代から過ぐること数百年，中国史の時代区分でいうところの春秋戦国時代に行き当たる。その名の通り，戦乱に明け暮れるこの時代に活躍した諸子百家，中でも墨子にもっとも理論的体系性をもった平和論の源流を見出すことができるのである[3]。墨子に関しては，すでに多くの論証が積まれており，平和論の原点としてもしっかりした位置付けがなされているが，ここでは，これまでとは異なった新たな角度から照射することで，さらにその意義を補強することを試みたい[4]。その際，これまでの墨子平和論の分析視角はその「非攻篇」と，そこにおける侵略戦争否定論の根拠としての「兼愛篇」における相互愛の考え方に求められることが通例であった。そのこと自体は，もとより何等問題はないが，ここでは，その「非攻」「兼愛」そのものが，墨子の国家観や国家関係論的視点から，全体系の中でどのように理論化されていたのか，その背景を探ることに焦点を当てたいと考えている。墨子の平和論は，まさに「論」というに相応しい理論的，体系的な構造を持っているところに特徴があり，それが理想論や情緒的な人道主義的アプローチとは大きく異なる所以であろうと考える。その点を強調するためにも全体構造の中でどのような構築のされ方をしているのかについて論点を深めてみたい。

後論との関係もあるので，まず墨子の考えそのものの成り立ちについて，必要な限りで，時代背景とその成立経過を跡付けて置こう。

『墨子』の時代

周が東遷した紀元前8世紀後半から，秦が統一を果たす紀元前3世紀半ばぐらいまでの約500年余り，中国各地にはさまざまな国が起こり，互いに相争う長きに渉る戦乱の世が続いたが，その前半を春秋時代，後半を戦国時代と呼んでいる。名目上周王朝は存在していたが，その勢威は全く衰え，求心力を喪失する中で，有力諸侯が抗争を繰り返し，多くの国々が興亡を重ねる中で，後に全土を統一する秦をはじめとして斉，楚，燕などが鎬を削ったのが戦国時代であった。それら各国は，主導権を巡って軍事的に争う一方で，その基礎となる国力の充実に関しても他国に負けじと精力を注ぎ込み，産業経済の育成はもとより，そのための生産技術，軍事技術にも磨きをかけ競い合っていた。富国強兵のためには，国治に関する知識，理論の探究にも傾注し，そういった才能，技能，知識をもった人士を開拓し，また集めることに余念がなかった。いわゆる文化人，知識人が重視され，そのため多くの逸材を輩出し，またその担い手たちによって高次の文化，思想が全面開化することにもなったのである。春秋時代は，魯国の正史の名に因んで命名されたが，それに続く戦国時代には，その魯に生まれた孔子を初めとする諸家が綺羅星の如く現れ，それぞれ自説を展開しつつ，雄渾な諸篇を編み出し，あるいは学派を結んで後身の育成と自派の隆盛を求めて華々しい論戦を闘わせた。各地の為政者はまたそれらを競って活用し，自国の繁栄に帰せしめるべく，挙って有為の諸学を招き入れた。そのようにして諸国が互いに覇を競い，入り乱れて相争うことを繰り返しつつ，他方，いわゆる諸子百家と呼ばれる各派がその勢を競った時代でもあったのである。

孔子を始祖とする儒家が最も良く知られ，また後世にも多大な影響を残したが，墨子に始まる墨家も，ある時期極めて隆盛を誇り，強大な教団を築いたことで知られている。しかし，ある時その姿は忽然と表舞台から消え去り，勢威を極めた期間が短かかったこととも合わせて謎に包まれたところの多い学派である。そういった点では，例えば，在り様としては随分相違はあるものの，一時期二大勢力として教勢を競った儒家との関係や，その強大な墨家教団を衰退に向かわせる契機となった楚王との関係などについて探ることが，学

派あるいは教団としての墨家の性格そのものとともに，勢力形成の思想的背景を知る手掛かりとなるかも知れない。しかし，ここでは，そういった墨家勢力の生々流転が主たるテーマではないので，墨子の平和論を解明する上で必要な限り言及することに止めたい。ともあれ，戦国時代のこのような時期に，何故平和思想の源流と言われる墨子の思想が生まれ，また教勢そのものは一挙に衰えながら，その根本思想は着実に継承され現代に至っているのか，そしてまたそのように引き継がれたものの真価はどのように評価されるべきかの検証を目標に，そこに必要な限りで，墨子及び墨家の在り様にも触れていくことにする。

『墨子』の成り立ち

墨子及びその学派の形成過程について，まずそのアウトラインを押さえておく。

墨子については，生没年を含めその詳細な伝記は判明していない部分が多い。名も墨翟（てき）とする場合が多いとは言え，これを固有名詞とはとらえず，墨は受刑者の証として刻印された墨を表し，また，翟は雉の羽のことでそれを頭に飾った工人集団を指したとする考え方も提起されている[5]。諸子百家各派の開祖については，多くを『史記』に頼ることが多いが，墨子に関してはその記述が極めて簡素であることが，詳細不明の原因とされている。『史記』ではその「孟子荀卿列伝」に「蓋し墨翟は宋の大夫にして，守御を善くし，節用をなす。或は曰く，孔子の時に並ぶと。或は曰く，その後に在りと」[6] 記されているのみで，他の諸派との扱いの違いは歴然としていた。このこと自体にも諸説があり，司馬遷が墨家を好まなかったためにこのような冷淡な扱いをしたとする中国の史家もいる[7]。その真偽の程はともかく，一時期儒家と並んで二大勢力としてその教勢を誇った墨家が，統一王朝秦の成立とともに，急激に衰微し，ほとんど跡形もなくその痕跡を絶ってしまったことが，開祖について不明な点が多い主因であろう。それでも後代になってその研究が進められる中で[8]，一応首肯できる推定が下され，現在でも通例この説が用いられることが多いようである。清朝末期の孫詒譲の『墨子間詁』に附せられた「墨子伝略」及び「墨子年表」がそれで，これによると，墨翟は魯の国に生まれ，その生年は，周の貞定王の在位初年，紀元前468年とされ，また没年は，周の安王の末年，すなわち紀元前376年と考えられている[9]。80年以上を生きたことになるのだが，この説は，クエスチョンマークを付しながら，他の文献などでも概ね採用されている[10]。これらは，墨子の残したといわれる著作などの断片を重ね合わせる中から導き出された推定とされているが[11]，その手法そのものに不確実性がついてまわり，その意味では，さらに研究が深められる中で塗り替えられる可能性は高いかも知れない。ただ，膨大な史資料に恵まれた儒家との関係の中では，儒家の面々が墨子について言及した，あるいはしなかった痕跡から，少なくとも墨子は孔子と同時代には生を共にしておらず，また，孟子の以前の人であったこともかなりの確度で推定される[12]。孔子は，紀元前551年から前479年，孟子は紀元前390年頃から289年頃とされているので，その間は約100年余りであったが，墨子はちょうどそこに生を得て活動していたと考えられているのである。『論語』中には墨家についての言及は一切なく，一方で『孟子』には舌鋒鋭く墨子批判が展開されているので，恐らくこの推定には大きな誤りはないであろう。

墨翟の生国を魯としたが，これも証明されておらず，「貴義篇」や「魯問篇」に魯国在住と思われる記述が多く，そこからの類推でこのように説明されることが多いのである。孔子没後，儒家と並び立つ顕学の一大学派を築き，集団を組織して積極的に活動したのが魯を拠点としていたことからも，この推定が導き出されている[13]。諸子百家と呼ばれる諸学派の中で，門人たちを中心に生活や行動を共にする一つの集団を形づくったのは，儒家と墨家だけだったと考えられているが，中でも墨家は思想集団としてだけでなく実践的な

行動集団，軍事組織として機能したために，その行動記録についてはある程度跡付けられるが，その最初の活動拠点が魯に置かれていたのである。墨翟の生国に関する推論も，このようなところを根拠としている[14]。

この墨家集団の在り様は，その思想の根本にも触れる重要な部分もあるが，紙数の制約からこの後余り触れられないので，ここで少し立ち入って検証して置こう。墨翟存命中は，その考え，行動規範を信仰的に崇敬する門人たちが集まり宗教教団的様相を呈していたと考えられている。ただこの点についても史料的な裏付けで論証されてはおらず，後述するような墨翟の教えの宗教的な要素，すなわち天帝鬼神に対する信望者が集団を形成していたと考えられている。諸国を遍歴し墨家思想を広める役割のグループがこのような中で形成されていった。それらの後継者を含め，以後墨翟の教えが伝承され，弟子たちによって篇が編まれていく中で，学究的にそれらを蓄積，解釈していくグループも形成され，墨者の重要な一群を形づくったと言われている。また，もう一つのグループとして，強国の侵略に晒される弱小国救済のために，防御戦を専らにする精鋭の軍事技術集団も組織されていた。「墨守」という言葉の由来となった専守防衛の戦闘集団であった。ここでは実戦とともに守城兵器の製作や，食糧生産，諸々の雑役なども担われていたと言われている[15]。

墨翟は，弟子の質問に答えて，組織の在り方について以下のように述べていた。すなわち，「能く談弁する者は談弁し，能く書を説く者は書を説き，能く事に従う者は事に従う。然る後に義の事成れるなり」[16]と。この考え方に沿って三つの主要なグループが集団内に組織されていたのであろう。そして，墨家の集団は，これらの実践的活動を通じて戦国時代に特異な存在として歴史に名を残していったのである。しかし，このような集団内の諸グループの形成は，一方で墨者集団の分裂をも導くことになったようで，墨翟亡き後，統率者となった鉅子[17]の座を巡っての争いがこれに加わり，より事情を複雑にし，墨者集団の一挙的解体にも結びついていったと考えられている。こういった状況について，『韓非子』「顕学篇」は「墨子の死後，その集団は，相里氏の墨，相夫氏の墨，鄧陵子の墨の三派に分裂した」[18]と記しており，また，『荘子』「天下篇」にも，墨者の集団が分裂し「互いに相手を別墨と罵り，堅白同異の弁をふるった」と記されていた。このように墨翟の後の集団の乱れが，また『墨子』そのものの内容的不統一，論旨の非一貫性にも繋がっていったと考えられる。天帝鬼神を説く一方で，人為の重要性を強調するなど，相容れない論理が混在していることがしばしば散見されるのは，このような墨者集団の分立の結果と言えるだろう。しかし，孟子をして「墨翟の言，天下に満つ」[19]と言わしめ，また，「二氏（孔子と墨子のこと）みな死すること久しきに，その従属するものいよいよ多く，弟子いよいよ豊かに，天下に充満す」と称された墨者集団は，やはり当時の一大勢力として忽（ゆるが）せに出来ない位置を占めていたのであり，その吸引力となった墨翟以後の思想形成には着目する必要があろう。とりわけ戦国の時代にあって，平等博愛，相互扶助を掲げ，徹底的な非侵略とそのための非戦を説いて，人々を糾合した事実は見逃せない。但し，このような求道的な精神や主義に殉じる堅牢な思想集団としての姿は，「後世の墨者」と呼称されるように，分裂含みの歴史を辿りつつあった後半期の墨者集団の特徴であったようである[20]。その超俗的な自己犠牲の行動や，狂疾的とも言えるリゴリズムの実践は，「頭のてっぺんから踵に至るまで，自分を忘れて身をすり減らし，天下に殉ずるもの」と孟子に皮肉られたように，むしろ奇異なものとして見とがめられ，記録され，また実際に貶斥（へんせき）されるような事態をあちこちで生んでいた。このような局地にまで立ち至る思想的特徴も一方で見逃すことはできないであろう。以下，墨子の思想形成そのものに少し分け入ってみよう。

『墨子』の思想形成

墨子の考え方を簡潔に表現したものとして良く引用されるのは「魯問篇」の一節であるが，弟子魏越に教え諭す形で展開されているその部分を先ず見ておこう。

> 子墨子曰く，凡そ国に入らば，必ず務めるを択びて事に従え。国家昏乱なれば，即ち之に尚賢・尚同を語れ。国家貧しければ，即ち之に節用・節葬を語れ。国家音に喜びて湛湎すれば，即ち之に非楽・非命を語れ。国家淫僻にして礼無ければ，即ち之に尊天・事鬼を語れ。国家奪に努めて侵凌すれば，即ち之に兼愛・非攻を語れ。

遊説に赴くことになった魏越が，先方の君主に見(まみ)えた時に，何を説けば良いかを尋ねたところ墨子がこのように応えたのである。訪れた先の状況，すなわち，国の秩序が乱れているのか，あるいは経済が疲弊しているのか，音楽に溺れているのか，さらには傲慢無礼であるのか，他を侵略することに力を注いでいるのか，といったことについて良く見極め，何が緊急の任務であるかを取捨選択して最も適切な対応を取ることを指示しているのである。そして，その対応策が10項目に渡って指示されている。これが十論と呼ばれ，墨子の思想の根幹をなすものと考えられている。

ただ，この十論も完全な形で現在まで残されているわけではない。諸子百家の中でも墨子はとくに散逸が甚だしく，また，その解説も後世，相当の時日を費やして後，やっと定本が出されるといった状況であったために，今，私たちが目にすることができるのは，全71篇中の53篇のみである。尚賢以降の十論は，いずれも上中下の3篇から構成されているが，その中でも，節用下（第二二篇），節葬上（第二三篇），節葬中（第二四篇），明鬼上（第二九篇），明鬼中（第三〇篇），非楽中（第三三篇），非楽下（第三四篇）はいずれも原典は失われている[21]。これらを収集し，そこにていねいな注釈を施したまとまった解説書は，先述した孫詒譲の『墨子間話』が最初で19世紀後半から20世紀にかけてのことであった。

前述のように，墨家集団の一挙的解体が大きく影響していると思われるが，ここでは，以下，十論に見られる墨子の考え方の根幹についてその特徴を整理しておこう。墨子の目指したものは，戦国の世にあって，諸国が覇権を巡って相争い，その過程で弱小国が大国の侵攻，併呑にあってさらに疲弊をとげていく事態を何とか回避し，それぞれが相並び立つように関係性を保っていくことであった。とくに大国に蹂躙される小国を徹底的に守備する防御戦にことさらウエイトを置いた戦術論に秀でていたのは，この目指すところを体現していた。軍事面でのこのような際立った特徴を示しながらも，一方で，戦争に寄らず，大国，小国それぞれが並び立ち共存するために，それぞれの国が経済力や政治力で充実した力を備えることを力説するところに墨子の十論の特徴があったと言える。門地・家柄等にとらわれることなく広く人材登用を図ること，国の基礎となる小単位でのまとまりを重視し，それを積み上げることによって，「民衆各自の意見を同一化する」[22] 国としての秩序を築きあげることの重要性を説いた「尚賢篇」，「尚同篇」は，政治的秩序の安定策として提起されていた。また。贅沢を廃し，節約を徹底することを説いた「節用篇」に始まり，「節葬篇」，「非楽編」などはいずれも冗費を省き，経済力を安定させることを説く内容であった。当時の葬儀は今では考えられないほど盛大であり，また長期に及ぶ服喪は生産活動そのものを阻害する大きな要因となっていた。為政者が莫大な費用を注ぎ込む礼楽も，国の疲弊，民の困窮に繋がるものとして否とされたのである。このような前提に立って，自らに対すると等しく他者に愛情を注ぎ，自らの利益のために他者を犠牲にすることを戒めた「兼愛篇」と，その具現として自国の利のために他国に侵攻し領土拡大を図ることを否定した「非攻篇」の提起が成り立っていたのであり，墨子の侵略戦争における非戦観の背景には，諸国相互の平和共存を実現するための社会秩序や政治的力，その基

礎としての経済力等に対する懐の深い，幅の広い洞察が前提として横たわっていたことを確認しておく必要があろう。

『墨子』，その合理的精神

その前提の幾つかについて，少し立ち入って検証することで，墨子の思想を通底している徹底した合理的精神について確かめておこう。「節用上篇」では，日常に必要な諸具について以下のような一節がある。「凡そ衣装を為るの道は，冬は暖かさを加え，夏は清しさを加うる者なり。鮮旦にして加えざる者は之を去る。其れ宮室を為るは，何を以て為るや。冬は以て風寒を圉き，夏は以て暑雨を圉ぎ，盗賊有らば固きを加うる者なり。鮮旦にして加えざる者は之を去る」と。すなわち，衣服には冬の寒さを防ぎ，夏の暑さを凌ぎ，風雨をさけるという本来の目的がある。また，住居も同様に，寒さ暑さを防ぎ，盗賊から守るという本来の目的がある。にもかかわらず華美に流れ実用的利便から離れた衣服や住居があったとしたら（聖人は）それを排除すると説いているのである。次いで，鎧，盾などの武具，５種類の武器[23]，舟や車などの運送用具についても同様の指摘が続き，結論として，「凡そ其の此の物を為るや，用を加えずして為ること無し。是の故に財を用うること費やさず，民の徳は労れず。其の利を興すこと多し」ということになる。つまり人間に実利をもたらさないのにこういった器物を作るということは考えられず，その製作に必要な財貨を浪費することなく，そこに携わる人々の力も疲弊させずに，利益を多く与えるようにすることが大切であるということになるのである。そして，これに続けてさらに，次のように語を繋いで行く。「有た大人の好みで珠玉・鳥獣・犬馬を聚むるを去りて，以て衣装・宮室・甲盾・五兵・舟車の数を益さば，数倍するに於けるや，若れ則ち難しからず」というように，大人すなわち力を持った人々が，嗜好に合わせて宝石や真珠を，あるいは愛でるために珍しい鳥や獣を，そして猟のための犬や駿馬を集めるようなことに財を注ぎ込むようなことをせず，衣服や住居など実用に供するものの数を増やそうとすれば，それ以前より数倍にすることが可能なはずであると。

また，当時の死者を弔う風習も，墨子にとっては行き過ぎた手厚さであり，無用の長物であるとしか映らない。「節葬下篇」では，次のように指摘する。

> 王公・大人の喪有る者に存りては，曰く，棺椁は必ず重ね，葬埋は必ず厚く，衣衾は必ず多く，文繡は必ず繁く，丘隴は必ず巨きくせよと。匹夫・賤人の死する者あるに存りては，殆ど家室を竭くさん。諸侯の死する者あるに存りては，庫府を虚しくして，然る後に金玉･珠璣は身に比なり，綸組もて節約して，車馬は壙に蔵せらる。

王公や力のある者が死んだ時には，必ず棺は何重にも重ねられ，地中深く埋められ，死者に幾重にも衣服を纏わせ，それらには精密な彫刻や刺繍を余すところなくほどこし，巨大な墳丘を造立するよう命じられることだろう。一般の卑賤な庶民が死んだ場合は，家財をほとんど使い尽すことになるだろう。諸侯が死んだ場合には，庫を開き，財貨や武器を空にするほどに，金銀，珠玉を散りばめ死者の体中に飾り付け，それらを真綿や組紐で結び，戦車や馬を墳墓に埋めるということで，当時の葬儀の盛大さがうかがい知れるのである。そして，さらに大量の財物を副葬するのも常態化しており，王宮が移転するのではと思われるほどの葬列が延々と続く光景なども含め，墨子にとってはそれらは浪費以外の何者でもなかったのである。

また，長期に渉る徹底した服喪を是とする当時の習慣に対してもその批判の舌鋒は鋭い。

> 若し若の言に法り，若の道を行い，王公・大人・士君子をして此を行わしめば，則ち必ず蚤く朝して晏く退き，五官・六府を治め，草本を辟き，倉廩を実すこと能わざらん。農夫をして此を行わしめば，則ち必ず蚤く出でて

夜に入り，耕稼樹芸すること能わざるなり。

百工をして此を....（後略）。

すなわち，号泣し身を窶して長期にわたる服喪を是とする久喪の主唱者の言うように実践したとしたら，王公や力のある者たちを長期間服喪させることになり，朝早くから夜遅くまで政務を執り，諸々の官僚組織を指揮監督し，開墾，開拓を事業として手がけ，国の倉庫を穀物で満たすようなことはできなくなってしまうだろう。農民がこの長期の服喪を行ったならば，朝早くから夜遅くまで農耕に勤しみ園芸に精出すことはできなくなってしまうだろう。もし工人たちが.... と続き，久喪の礼が，いかに通常の政治，行政，生産活動にとって弊害となるかを厳しく指弾するのである。

この攻撃の矛先は，また，当時王侯貴族の間で盛んに持て囃された楽器の製造にも及ぶ。「非楽上篇」は次のように述べる。

今，王公・大人は，唯無楽器を造為し，以て事を国家に為す。直だに撩水を培み，懐垣を折ちて之を為るには非ざるなり。将に必ず厚く万民に措斂し，以て大鍾・鳴鼓・琴瑟・竽笙の声を為さんとす。

今，王公や力を持っている人たちは，楽器をやたらと作らせ，しかもそれを国家事業にしている。ただ，これは水たまりから水を掬うように，あるいは，土塀の壁土をはがしてこねるようなわけにはいかない。必ず万人に重税を課して，大きな鐘や鳴鼓，琴やさらに大型の琴である瑟，笙やさらに大ぶりの笙である竽といった楽器を製造しようとしているとし，そしてこの後さらに語を継いでその問題点を次のように指摘する。すなわち，例えば昔の聖人も確かに庶民に税を課して車や船を作らせた。しかし，そうやって作られた舟や車は，人々の肩の荷を軽くし，また遠くまで歩く苦労を和らげたのだから，非難には当たらないだろう。しかし，楽器はどうであろうかとして，次のように論を進める。「民に三患有り。飢えたる者は食を得ず，寒ゆる者は衣を得ず，労るる者は息うを得ず。三者は民の巨患なり」と。すなわち，民衆には三つの大きな災禍があって，飢えた者が食を得られず，凍えた者が衣服を得られず，労働に疲れた者が休息を得られない。この三つの大きな苦労が常に付きまとうのであると。その上で，こういった庶民の憂いに対し，大きな鐘をうち鳴らし，大太鼓を連打して，またまた琴を喧しく掻き鳴らし，笛を吹き連ねることで解決がつくだろうか。もしそうならば，楽器を国家事業として製造することを私は非難しないと言うのである。

このような論法によって墨子が切り捨てた厚葬・久喪・礼楽は，しかし他方，当時の儒家がとりわけ重んじた事柄であった。君臣上下の道を正し，身分秩序を整えることで国家社会の成り立ちの拠り所を確立しようとする儒家の思想にあっては，崩れ行く周初の礼楽を再帰することこそ必須であり，それを真っ向から否定する墨子の諸説は忽せにできないものであった。儒家の墨家批判はこのようなところから発していたと言えるだろう。

それはさておき，墨子のこのような徹底した合理性はどのような根拠から成り立っていたのだろうか。まず，その大前提としての墨子の人間観といったものに注意が惹かれる。「非楽上篇」では，禽獣や鹿，飛ぶ鳥や昆虫の類と人間を比較して，それら獣たちが，生まれながらにして毛皮を纏い，鋭い爪や牙を持っていたり，あるいは敏捷に動ける足をもち，飛ぶ羽をもって，自然の状態で食物を採り生活を営んでいるのに対し，「今，人は此れとは異なる者なり」として，「其の力に頼る者は生き，其の力に頼らざる者は生きず」とするのである。すなわち，獣たちが「雄をして耕稼樹芸せず，雌をして亦紡績織紝せざらしむと雖も，衣食の財は固より已に具わる」のとは違って，「強めて事に従わざれば，即ち財用は足らず」ということになり，また為政者が政に精励しなければ，忽ち行政は遅滞し，治安は乱れてしまうものであると説くのである。すなわち，人は生活のた

めの富の生産について，自らの力を振り向け，土を耕し機を織る努力を注がなければ生き延びられない存在であることを強調するのである。そしてそのことを土台に社会を構成し，その社会を統べる者もまたその職務を全うしないと，社会の秩序維持はできないと強調する。その限りで，人には役割，任務の違いはあり，その上での「君子」は居り，また「賤人」もいるが，基本的には人としての分け隔てとは余り考えられていないようである。「兼愛篇」にもっとも集中的に示されている博愛主義は，その基本に原則としての平等観があり，それは他の篇でも随所に読み取れるところである。自らの生を紡ぐための労働を課せられた人の間には，その限りでは大きな分け隔ては考えられていなかったと言えよう。この点は，もちろん非戦の原則にも繋がることであるが，経済合理性を際立たせる労働，生産，そして富の均霑といった発想に支えられているとことに注目しておきたい。

この根底には，低位にあった当時の生産諸力と，気候不順や痩せた地味など劣悪な生産諸条件に対する冷静な判断，評価があったと考えられる。各篇随所に散見されるが，「墨家は，人類が生産できる富の総量は，そもそも人類すべての生存を保障しうるか否かさえ危ぶまれるほど，絶対的に不足している」[24] と考えており，それ故に徹底した「節用」により無駄を省き，少しでも富を蓄積し有用に消費することが目指され，また，実利を生まない，あるいは無駄を作り出す過度な葬送や礼楽は否定され，そして，一方で相互扶助が重視され，それ故他を侵害することが否定されることになるのである。

「兼愛」についてもこの観点から少し立ち入って考えておこう。良く知られているように，墨子の愛は，自己愛ではなく，徹底した博愛であって，己を愛するように人を愛し，それ故，自分の国を愛し大切にするのと同じように他国も大切にし愛さねばならないので「非攻」になるのである。愛するという点では平等性が貫徹された無差別な人間観が成り立っているとも言える。儒家，とりわけ孟子はこの無秩序なることを指摘し，『滕（とう）文公章句』で「墨子は兼愛す，之父を無（な）みするなり。父を無みし君を無みするは，これ禽獣なり」と厳しく糾弾した。これはまた，墨子の愛が利と結びついていたことと無関係ではない。墨子の兼愛は利他の利と結びついており，「兼愛交利」と言われる[25]。『大取篇』には次のような例が引かれている。

> 死生の利，一の若（ごと）きときは，択ぶことなきに非ざるなり。一人を殺して以て天下を存するは，一人を殺して以て天下を利するを是（ぜ）とするなり。己を殺して以て天下を存するは，己を殺して以て天下を存するを是とするなり。事為の中に於て軽重を権（はか）る，これを求と謂う。

生死が天下の利にかかわっているときは，重大なことなのでもとより選択をしなければならないが，一人を殺して天下を存するというような場合には，比べものにならないから，一人を殺して天下を利することを選ぶべきである。己を殺すことが天下の他の多くの人々を利することになるのであれば己を殺すべきである。すべての行為には軽重があって，軽きを捨て重きを求めるのが人としての正しい選択であるというのがこの主張である。同じ『大取篇』の中では，次のようにも記している。「人を愛するは己を外にせず，己も愛せらるる所の中に在り。己も愛せらるる所に在れば，愛は己に加わる。倫列するものの人を愛するは己を愛するなり」というように，人々が己を捨てて他者を愛するようになれば，結果的には己を捨てたことが己の利となり還って来ることになると説くのである。正しい判断で行いを為すもの，つまり「倫列するもの」が他者を愛するということは，結局己を愛することになるという考え方である。墨子における兼愛は，この意味で多分に功利的であり，また合理的でもあって，「愛利」という概念を正確につかんだ上で，その徹底した無差別，平等主義に基づく博愛を評価する必要があろう。

非戦論の背景―まとめにかえて

当時の生産諸条件，生産諸力を見通したところで成り立っていた経済合理性は，戦乱に明け暮れた当時に求められていた国家運営の政策にも適用された。「節用」は国家運営の要諦とも考えられ，外への侵攻に寄らざる経済力アップの方途，つまり「非攻」に基づく経済政策に結びついていったのである。「節用上篇」にそのことが示されている。すなわち，この理（ことわり）に通じている者が政治を掌ったならば，「一国は倍すべきなり。之を大にして政を天下に為さば，天下は倍すべきなり。其の之を倍するは，外に地を取るに非ざるなり。其の国家に因り，無用の費（つい）えを去らば，以て之を倍するに足る」という結論に至るのである。経綸の才を備えた為政者が政治を領導することによって，国家の利益は倍増するとして，その政治を天下全体に行き届かせれば，天下の利益が倍増することになる。このようにして利益を倍増できるのは，自国の外に領土を広げていくことによってではなく，国内にあって無用の支出を取り除いていくことで可能になるとの結論である。このようにして，「其の令を発し，其の事を興し，民を使い財を用うるや，用を加えずして為すこと無し。是の故に財を用うること費やさず，民の徳は労れず。其の利を興すこと多し」ということになる。適切な命令を発し，有効な事業を興し，人々を用いて，財貨を注ぎ込む時には，実用的な利益を生まないことには手を出さないことが大事で，浪費をせず，人々を疲れさせずその力を引き出していけば，さらに多くの利益をあげることができると力説しているのである。

このことを「非攻」に引きつけて今一度確認しておくと，つまり，他国の併呑によってある国が富んだとしても，生産総量からすればそれは富の移行に過ぎない。実質的な経済力の増強のためには，無駄を省き労働効率をあげることが肝要なのであって，低位な生産力と劣悪な生産諸条件の下では，そのことの追及こそ為されねばならない。つまり墨子にあっては，他国への侵略戦争は，戦争そのものが浪費であると同時に，生産総量の拡大につながらない無益なことであった。「非攻」は，経済合理性からいって当然のことだったのである。

「兼愛」における当時としては瞠目すべき平等観，博愛主義，そしてそこから導き出せる他国，他領への侵攻を否定した「非攻」という，『墨子』における非戦論は，その道筋だけを追って説かれる時，ともすれば，自己犠牲の有り様や，他者への惜しみない愛情の持ち方，そして，これまた徹底した滅私による専守防衛の思想などに，非日常的な，尋常ならざるものが見出され，まさに儒家がそうしたように，リアリティの欠如による非現実性，あるいはそこまで行かないまでも理想論としての空理性に帰せられることも少なくない。確かに，墨翟以後の鉅子時代，守城の使命を果たせなかった孟勝は，その契約不履行の責めを負い，関係した墨者 180 名全員と集団自決を遂げる。その結末を大鉅子に上奏した使者 2 名も，報告終了後，わざわざ一敗地に塗れた守城に立ちかえり，先に逝った墨者たちの後を追って自らの命を断つという徹底ぶりに至っては，剽悍さというよりむしろ狂疾的なものを感じさせ，人をしてより現実感覚から遠のかせる効果があったのかもしれない。平和論の嚆矢として今に至るまで高く評価されながら，また一方で，このような誤解や誤った印象で受け止められる側面も強かったと言える。しかし，ここで少しく検討してきたように，その平和論が，平和思想一般としてではなく，まさに論として，その体系化された理論的骨組みを有していたことに，墨子の原点としての意味があるのであり，それは，また，当時の経済状況を的確に把握，分析し，その上で国家の経綸を組み立てていた透徹した認識力，合理的判断力に支えられていたが故に，今日まで引き継がれる耐久力を持ち得たと言えるのである。

しかし，その一方で，すでに触れたように，全篇は必ずしも統一がとれておらず，組み立てられ

た論理も首尾一貫していない点も多い。生産と労働を重視することからわかるように人為に多くを期待し，多くを委ねようとしているにもかかわらず，『天志篇』などでは，天帝鬼神に拠って立つことを力説する。また，「非命篇」などでは明確に宿命論を否定しつつ，歴史を振り返って過去を跡付けることの重要性を説き，また，人々の生活，生産活動について常に調査を怠らずデータ収集と解析を手掛けること，それらをもとに有効と思われる施策を行いその成果を図って，よりよい策を講究することを提唱している。調査，分析，実験といった科学性をうかがわせる政策論も登場するなど，さらに検証を要する部分は多く残されている。本稿のテーマに沿いながらもう少し触れたかったが，紙数の制約上果たせなかった。他日を期したいと思う。

注

1) 『朝日新聞』2013 年 3 月 2 日付記事など。1976 年にこの原則の徹底が図られて以後，83 年に米国をこの対象外とすることから始まった例外化の動きは，共同開発などの名目を駆使することにより，とくに 21 世紀に入ってから加速度的に強まっていたが，この F35 戦闘機の導入を契機に実質的に形骸化された。とくにこのステルス機は中東にあって常に軍事的緊張を抱えるイスラエルに配備されることによって，国際紛争当事国やその恐れのある国への輸出を認めないという原則は踏みにじられることになった。

2) 最古の平和思想と言われる一節は「老子」にあり，「兵は不祥の器」であって，世は「つねにこれを悪む」ものとされ，まただからこそ君子はそういったものを用いるべきではないと説いている。しかし，紀元前 6 世紀のこの時点では，その主張には人間の叡智の発露は垣間見れるものの，平和思想としての体系的，理論的枠組みは構築されていないと考えられている。これについては，拙稿「2 分法的平和分析の再検討」白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター『研究年報』Ｎｏ．17 で触れたが，いずれにしろ，この老子に最古の平和思想の源流を求めることができるために，古代の東洋思想に目を向ける必要があろう。

3) 墨子に関しても，すでに前掲拙稿で触れておいたが，老子に続くこと 1 世紀余り後，世界思想史上はじめて理論的，体系的枠組みをもった平和思想として位置付けられる考え方が墨子によって提起されたと言われている。前掲拙稿では，この墨子の分析がテーマではなく簡単に触れるだけだったので，「非攻篇」「兼愛篇」を土台にした平和論のエッセンスに言及したが，これまでの墨子の平和論の取り上げられ方は，この方法が一般的であり，ここではその点をされに深めたいと考えている。

　尚，本稿では，墨子の諸篇全体を総称する時は『墨子』と表記し，また，各篇は，多くが，上，中，下と分かれているので「非攻上篇」，「兼愛中篇」，「節用下篇」といった形で表記することとする。

4) 墨子を平和思想として取り上げることに先駆的役割を果たしたのは石川三四郎であろう。石川の小論「墨子非戦論」は『ディナミック』第 25 号，1931 年 11 月に掲載されている。横田喜三郎・石川三四郎『日本平和論体系』11　責任編集家永三郎　日本図書センター 1994 年 4 月。宇野哲人・他著の『支那哲学史講和』中の墨子「非攻篇」の一節を無断で借用したと石川自ら記しているように，非戦論のエッセンスをコンパクトにまとめた小論として，満州事変を経て軍国の道を直走る当時の世の風潮に向け警鐘を発したのであろう。墨子及び墨家についての先行研究は膨大であるが，ここでとくに多く参照したものについて幾編かを掲げておく。墨子研究としてまとまったものでは渡邉卓『古代中国思想

の研究』創文社　1973年がある。「<孔子伝の形成>と儒墨集団の思想と行動」とサブタイトルにあるように，儒家，墨家の思想と行動様式について精細な分析が行われている。墨子に関しても，十論を中心とする基本思想の骨格について研究され，また墨家集団の盛衰とその行動の特徴，あるいは三墨と言われるその後の分裂を踏まえた後代への影響力を含めた分析が精緻に行われている。また，宇野精一・中村元・玉城康四郎責任編集『講座東洋思想　4　中国思想Ⅲ』東京大学出版会　1967年も第1章で渡邉卓「墨家思想」として墨子研究を本格的に取り上げ，法家思想ともに論理思想の一翼としてその思想の本質，時代背景などを分析している。これら研究書とともに訳書及び抄訳を土台とした解説書も多数あるが，とくにここでは，以下のものを中心に参照した。駒田信二『墨子を読む』勁草書房1982年，M・L・チタレンコ著／飯塚利男訳『[抄訳]古代哲学者　墨子』MBC 21　1997年，鎌田正監修　江連隆・塚田勝郎著『漢文名作選　Ⅰ　古代の思想』大修館書店　1999年，森三樹三郎訳『墨子』ちくま学芸文庫　2012年などである。本論中に引用を行う場合は，原典ではなく，これらの訳書からの読み下し文を用いたが，とくに断らない限り駒田著の訳を採用した。

また，墨子の平和思想については，村瀬裕也『東洋の平和思想』青木書店　2003年から多くを学んだ。さらにその他の関係書として，小林正弥『非戦の哲学』ちくま新書398　2003年，湯浅邦弘『諸子百家』中公新書1989　2003年，浅野裕一『古代中国の文明観』岩波新書944　2005年などからも多くを参照した。

5) 渡邉前掲書，浅野前掲書など。

6) 森前掲書

7) 森前掲書

8) 次に触れるように実際に本格的に再評価され分析が進んだのは18世紀に入った清朝末期のことで，やはり秦時代に完全に教団そのものが姿を消したことが大きく影響していたと言えよう。その後1920年代の中国でかなりまとまった形で墨子研究が進んだようで，石川三四郎の小論はそのような動向にも影響されていたのかも知れない。この時期の中国での研究状況については，チタレンコ前掲書が詳しい。

9) 森前掲書

10) 例えば，鎌田監修前掲書や浅野前掲書などもこの説を採用している。

11)「墨子」各篇の成立年代などについては，駒田前掲書及び森前掲書が詳しい。また，チタレンコ前掲書には墨子関連年表が整理されている。

12) この点については，湯浅前掲書及び森前掲書がこの説を採用している。

13) 湯浅前掲書，浅野前掲書は概ね，この説に従って解説を行っている。

14) この点については，森前掲書の解説に詳しい。

15) 軍事集団としての墨家は広く関心を集めているところであり，さまざまな取り上げ方をされているが，参考文献としてあげた諸書の中では，渡邉前掲書及び駒田前掲書が史料的な検証を土台に学術的な分析を行い，思想集団としての特異な在り方とともに実際の守城技術などについても精細に明らかにしている。

16)「耕柱篇」浅野前掲書。

17)「巨子」の呼称を用いる訳書，研究書もある。例えば，村瀬前掲書など。

18) 森前掲書。次の『荘子』「天下篇」の引用も同書より。

19)『孟子』より。次の引用は『呂氏春秋』「上徳篇」より。いずれも森前掲書。

20) 浅野前掲書。尚，次の引用は『孟子』からで，このような捉え方は，村瀬前掲書でもなされている。

21) 駒田前掲書，森前掲書。

22) 森前掲書

23)「五兵」とは戈，殳，戟，酋矛，夷矛の５つの武器を指す。

24) 浅野前掲書。ここで浅野は，この点を墨子の思想の特徴として強調しているが，この見解に賛成である。本稿で述べたように，当時の生産諸条件や生産力について，的確な判断を下し，そのことが相互扶助を必然とし，ために非戦を唱える根拠となったと考える。駒田前掲書も墨子のこのような考え方を「実利主義」と捉えていて，ほぼ共通した認識だと言える。

25) 駒田前掲書。本書では，ここにおける利の説き方が，兼愛の基礎になっている点を強調しているが，この指摘は重要だと考える。尚，次の『大取篇』からの２つの引用も同書から。